

---

---

日本図書館文化史研究会

ニューズレター

第 114 号 2010 年 11 月 22 日

日本図書館文化史研究会

<http://www.soc.nii.ac.jp/jalih/index.html>

〒101-8301 千代田区神田駿河台 1-1

明治大学司書・司書教諭課程  
郵便振替口座 00170-5-164973

---

---

■■ 目 次 ■■

日本図書館文化史研究会 2010 年度研究集会, 好評裏に終了 .....	2
日本図書館文化史研究会 2010 年度第 2 回研究例会のご案内 .....	3
『図書館文化史研究』第 27 号正誤表	
UCLA 図書館見学記 (楊 韜) .....	5
2010 年度研究集会シンポジウム報告要旨 .....	6
2010 年度研究集会個人発表要旨 .....	7
『図書館文化史研究』第 28 号原稿募集のお知らせ	
『図書館文化史研究』投稿規定・執筆要領 .....	9
運営委員会通信 .....	11
事務局だより .....	12
会費納入のお願い	
住所変更等のご連絡をお願いします	
会員動向	
『ニューズレター』原稿募集のお知らせ	

## 日本図書館文化史研究会 2010年度研究集会，好評裏に終了

2010年9月11～12日，東京都日野市の実践女子大学で「日本図書館文化史研究会2010年度研究集会・会員総会」が開催されました。参加者は75名です。大学の研究者，図書館職員，大学院生のほか，近隣地域の市民の方々の参加も多数あった点が今回の特色でした。昨年よりも2倍弱の参加者を集めました。

11日には阪田蓉子代表の開会挨拶に続き，まず会員総会が実施されました。寺田光孝氏を議長に選出したのち，2009年度の活動報告・決算報告が行われました。決算は『ニューズレター』の支出について印刷業者に一部送金が済んでいない状況ですが，総額に関して承認されました。続いて2010年度予算案が提案され，承認されました。また，『ニューズレター』111号（2010年2月7日）などで周知して参りました「（仮称）図書館文化史研究文献目録」の進捗状況が報告され，昨年の会員総会で承認された「（仮称）日本図書館文化史研究会研究賞」の創設準備が進められている旨，報告されました。

13時40分より「『市民の図書館』40年」と題したシンポジウムが開催されました。司会進行は奥泉和久氏が担当し，森下芳則氏，山口源治郎氏から報告をいただいたのち，全体討論が行われました。森下・山口両氏の報告要旨は，6ページをご覧ください。また，シンポジウムの模様は『図書館文化史研究』第28号（2011年）に掲載予定です。

シンポジウム終了後，マイクロバスでJR豊田駅そばの「浜寿司」に移動して，懇親会が開催されました。30名の参加者が2階のお座敷で歓談の一時を過ごし，たいへん好評でした。

今年度はオプションツアーが2つ企画されました。ひとつは「日野市立中央図書館見学会」であり，11日午前中に実施され，24名が参加しました。もうひとつは「実践女子大学図書館見学会」であり，こちらは12日お昼に実施され，20名が参加しました。実践女子大学図書館では「向田邦子コレクション」など貴重な資料を見学することができました。

12日には，個人発表4件が行われました。個人発表の司会は，石川敬史氏と泉山靖人氏が担当しました。各発表の要旨は，7～8ページをご覧ください。また個人発表終了後，運営委員会が行われました。運営委員会の議事要旨は11ページに掲載しました。

終わりにになりましたが，このたびの研究集会・会員総会の開催に際しお世話になりました塚原博氏，小林卓氏，松尾昇治氏をはじめ，実践女子大学関係の方々に，心よりお礼申し上げます。（三浦記）

日本図書館文化史研究会  
2010 年度第 2 回研究例会

「清水正三資料整理の中間報告会」のご案内

清水正三氏が亡くなり（1999 年 1 月 17 日死去，享年 81 歳），氏が生前収集された資料が日本図書館協会に寄贈されました。しかしさまざまな事情から，その整理が行われないうままとなっていました。

清水氏の逝去からすでに 10 年以上を経過し，資料の劣化が懸念されました。また，清水氏の図書館界における足跡を考え，2010 年春，有志による清水資料の整理が開始されました。

図書館界が幾多の困難に直面している今こそ，清水氏の残された資料の持つ価値をあらためて考える必要があるといえます。また今後，こうした資料の収集と保存を進める上でも少なくない意義があると思われます。

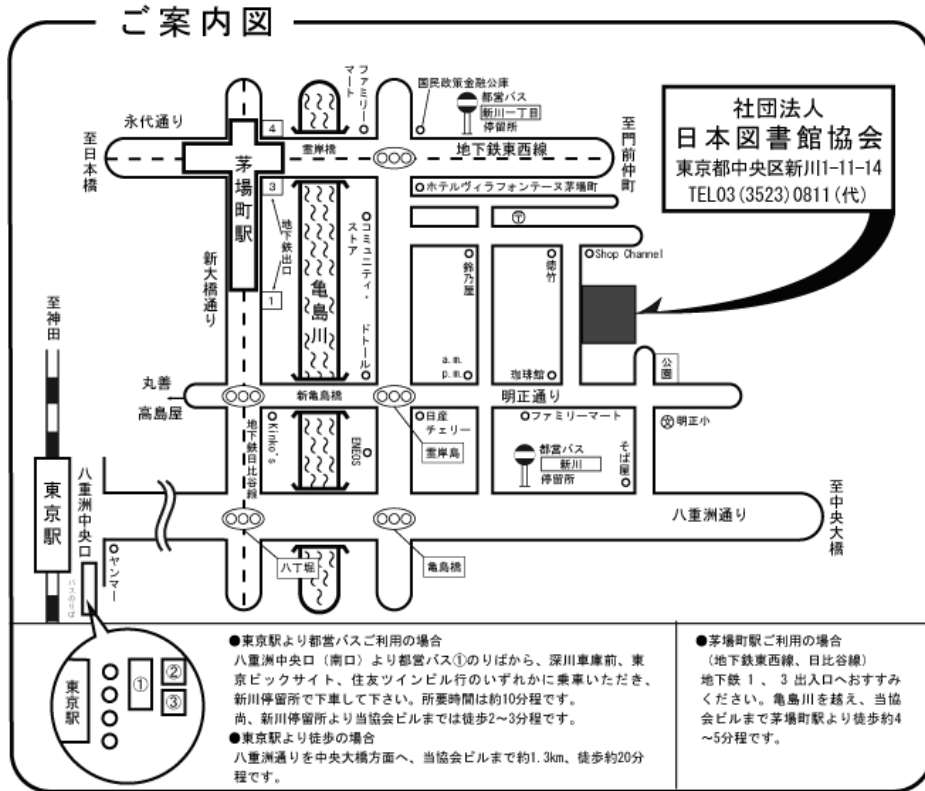
そこで今回，清水氏による収集資料の概要，整理状況をご紹介しますとともに，皆様からのご意見などをいただくために，下記のように中間的な報告を行うことにしました。多くの方のご参加を期待します。

記

- 日 時：2010 年 12 月 25 日（土） 13 時～16 時 30 分
- 場 所：日本図書館協会会館 2 階研修室  
東京都中央区新川 1-11-14  
東京メトロ茅場町駅（東西線，日比谷線）下車徒歩 5 分  
(<http://www.jla.or.jp/kaikan.htm>)
- 主 催：日本図書館協会，図書館問題研究会，日本図書館文化史研究会
- 参加費：500 円
- 申込み：事前申し込みは不要です。当日，直接会場にお越しください。
- プログラム
 

12:30	受付開始		
13:00	開 会		
13:05-13:35	報告①	松岡 要	清水正三氏と清水資料の概要
13:35-14:05	報告②	奥泉 和久	戦前期東京市立図書館関係資料などについて
14:05-14:15	休 憩		
14:15-14:45	報告③	小黒 浩司	清水資料に見る図書館の自由
14:45-15:15	報告④	西村彩枝子	清水資料の整理方法とその経緯
15:15-15:25	休 憩		
15:35-16:25	討 論		
16:30	閉 会		

会場案内



**『図書館文化史研究』第27号 正誤表**

内容に一部誤りがありました。お詫びして訂正いたします。

- 目次, 119頁 標題および2行目, 119~135頁 肩
- (誤) 津山光洋著『図書館の屋根の下で』を読んで
  - (正) 津村光洋著『図書館の屋根の下で』を読んで

- 目次 (英文)
- (誤) by TSUYAMA Mitsuhiro
  - (正) by TSUMURA Mitsuhiro

## UCLA図書館見学記

名古屋大学大学院 楊 韜

2010年6月下旬、米国カリフォルニア大学ロサンゼルス校、通称 UCLA (University of California, Los Angeles) に一週間ほど滞在し、校内にある複数の図書館を見学した。

UCLA では、一般的に言う大学図書館のほかに、音楽図書館 (Music Library) や芸術図書館 (Arts Library) などユニークな専門図書館もある。なかには、重厚な建築様式をもつパウエル図書館 (Powell Library) には、UCLA の教員と学生だけでなく、多くの一般人 (観光客も含め) が訪れている。パウエル図書館の入館は特に制限がない。入口のカウンターには、図書館のパンフレットがないが、黄色の館内配置図があり、利用後返却すればよいとなっている。館内には、建築外観の煉瓦色に近い暖色調で統一しており、とても明るい。しかも、天井や階段などに施された建築装飾からその格式と歴史を感じる。筆者が訪れた日に、二階ではドイツ語で書かれた古書の展示スペースがあった。伝統的な様式の閲覧室のほかに、個性的なソファや机を置いてあるモダンな閲覧ルームもあり、学生たちはくつろいだ様子で本を読んでいる。大学図書館というより、むしろ博物館の雰囲気だ。

滞在中、筆者は資料調査のため、主に UCLA の東アジア図書館 (East Asian Library) を利用した。東アジア図書館は、パウエル図書館からほど近い、キャンパス北部にあるリサーチ図書館 (Research Library) の二階にある。ちょうど今一部改装工事中だが、利用にあたり特に不便を感じなかった。この東アジア図書館の全称は The Richard C. Rudolph East Asian Library である。Richard C. Rudolph は、UCLA 東方言語学部の元学部長である。彼が 1948 年の訪中の際に収集・購入した膨大な中国語と日本語の書籍は、今日の東アジア図書館の基礎となっている。2009 年末現在、所蔵書籍の点数は 60 万を超え、うち中国語書籍が 30 万点、日本語書籍が 20 万点弱、韓国語書籍が 5 万点となっているほか、9 万点以上のマイクロフィルムも所蔵している。東アジア図書館の利用も特に制限がない。館内の本棚にある書籍は、言語別に分類しているわけではなく、宗教・歴史・文学などの種類に区分されている。また、購入している中国語や日本語の雑誌と新聞の種類は驚くほど豊富である。東アジア研究の人にとって、とても利用価値の高い図書館である。

付記：

UCLA の図書館、とりわけ SRLF (UC Southern Regional Library Facility) などの取組について、マルラ俊江氏や富岡達治氏による詳細な紹介があります (それぞれ京都大学図書館機構報『静脩』37 - 3号, 38 - 3号)。ご関心のある方は、そちらをご参照下さい。

## 2010 年度研究集会シンポジウム報告要旨

### 報告①

森下 芳則（前田原市図書館）

○ 報告題名

『市民の図書館』と同時代を生きて

○ 報告要旨

私は 1973 年に昭島市民図書館に就職，1977 年に日野市立図書館に移り，1999 年から愛知県田原町（当時）で新館準備に携わった。2002 年の開館から館長をつとめ，2010 年 3 月に退職した。『中小レポート』（1963 年）は近過去と思えたが，大学在学中に発行された『市民の図書館』は同時代という感覚だった。図書館員として働いていく上で，私が依拠したのは『市民の図書館』と『自由宣言』だった。

『市民の図書館』を始めとする図書館運動によって，1970 年以降，多摩地域の図書館が急速に充実した。その変化を『日本の図書館』の数値をもとに振り返った。日野市立図書館においても，活力に満ちた活動によって高いレベルで安定したサービスが実現した。一方で，それが日常化するなかで，理念の空洞化が進み，『市民の図書館』からの乖離を感じるがあった。田原では当たり前の図書館活動，社会の変化に対応し，利用者の求めに応える図書館運営を目指した。その基本に『市民の図書館』があると考えている。

### 報告②

山口 源治郎（東京学芸大学）

○ 報告題名

『市民の図書館』と公共図書館の戦後体制

○ 報告要旨

『市民の図書館』が刊行され 40 年が経過した。『市民の図書館』は今日においても強い規範性を保っているとともに，常に論争的な存在であり続けている。本報告では，『市民の図書館』の成立過程と内容を分析し，その特質とともに歴史的意義を明らかにし，強い規範性の根拠が，1970 年代初頭に成立する公共図書館の「戦後体制」の重要な要素として存在したことに求めた。

同時に今日，「戦後社会」の転換に直面し公共図書館のあり方が問われている。本報告では，市場主義が蔓延する中で，『市民の図書館』が「図書館の社会保障的性格」を鮮明にしたことの今日的意義を確認し，『市民の図書館』の方法的視点から学ぶことも意義を指摘した。

## 2010 年度研究集会個人発表要旨

### 個人発表①

渡辺 生子（日野市立日野図書館分館長）

○ 発表題名

「市民の図書館」を实践する：日野宿発見隊の活動

○ 発表要旨

これは、小さな分館の取り組みです。公立図書館の存在意義は市民の図書館にあること。そして、「暮らしの中へ図書館を」をより実践的に取り組むために、図書館が外へ出て、住民と一緒に活動を始めました。

まち歩き会や古い写真の収集を通して、人々の暮らしこそがお宝だと気づいて、その価値を記録し発表してきました。住民の思いの実現は、まちを元気にさせ、住民が自ら学び、活動する場となりました。職員もまた、その記録を残していくという、創造する仕事の楽しさを学びとった実践報告です。

### 個人発表②

梶谷 純一（大阪市立大学大学院創造都市研究科博士後期課程）

○ 発表題名

第二次大戦中の中国における日本軍接收図書の研究

○ 発表要旨

本発表では、まず先行研究と関係文献を4つに時代区分して整理し、その問題点を明らかにして、自身のこれまでの研究を紹介した。その上で、占領地（華北、華中、華南、上海租界、香港）ごとに、日本軍接收図書の実態を明らかにしていった。研究の成果としては、各占領地における図書接收と活用、内地への搬入、占領期の図書返還に至る一連の史実を素描することができた。また、日本軍図書接收の目的は、地域ごとに異なるが、思想統制（抗日図書の接收）や情報収集（中国調査、兵要地誌調査）という現実的な戦争遂行のための目的を有していたことも判明した。

### 個人発表③

吉田 昭子（東京都立中央図書館）

○ 発表題名

伊東平蔵と東京市立図書館の設立ーその公共図書館思想をめぐってー

○ 発表要旨

伊東平蔵（1856-1929）は東京外国語学校教授を務め、黎明期の図書館界で重要な役割を果たした人物とされる。しかし、伊東に関する研究は少ない。

本発表の目的は、伊東の人物像と公共図書館思想を明らかにすることである。先行研究や公刊された資料に加え、横浜市中心図書館所蔵伊東平蔵関係資料（日記、書簡類の複製）や東京都公文書館等の一次資料による文献調査を実施した。

彼の生涯を7期に分けて検討した。その中で東京市立図書館準備期にあたる第4期（明治33～大正2年）は重要な転機である。伊東は大日本教育会書籍館や大橋図書館、日比谷図書館での通俗図書館経営経験を、佐賀や横浜市図書館等で具体的、発展的に生かしている。そこには、国、県、市、私立等の多様な図書館の設立や運営に携わった伊東ならではの現代に通じる公共図書館思想の展開がみられる。

個人発表④

小川 徹（名誉会員）

○ 発表題名

『佐野友三郎訳 ディクソン英文典直訳 攻玉社蔵版』共益商社書店、明治20年」考

○ 発表要旨

スコットランド生まれの James Main Dixon は、1879（明治12）年来日、工部大学校、文科大学で英語・英文学を教え、その間多くの著書を出した。その一冊“English lessons for Japanese students”（明治19年刊行）の第二版（明治22年刊行）をもとに学生であった佐野友三郎が翻訳した。この訳本をめぐる疑問、Dixon 先生から翻訳を依頼されるほどの関係はどのようにして生まれたのか、その刊行年は第二版刊行前である、何故なのか、などについて私見を述べた。

『図書館文化史研究』第28号 原稿募集のお知らせ

機関誌『図書館文化史研究』第28号の原稿を募集中です。

原稿の締め切りは、2010年12月末日です。ふるってご投稿ください。

なお、この件に関するお問い合わせ、ならびに原稿の送付先は別記事務局までお願いします。



## 『図書館文化史研究』投稿規定・執筆要領

### 応募資格等

1. 日本図書館文化史研究会会員は投稿することができる。
2. 応募原稿は未発表のものに限る。ただし口頭で発表し、これをまとめたものは除く。
3. 掲載原稿の著作権は、本研究会に帰属する。ただし著者は、本会に連絡して、転載することができる。

### 応募原稿等

4. 原稿は完全原稿とする。ワープロ等を使用する場合、A4用紙（縦位置）、1行40字×40行・横書きの書式に設定する。手書きの場合は400字詰（20字×20行）原稿用紙を用いる。
5. 枚数制限は特に設けないが、長文の場合2回以上の分載とすることがある。
6. 図版は占有面積1ページ分を400字詰原稿用紙3枚の割合で換算し、そのまま版下として使用できるよう鮮明なものを提出する。
7. 原稿はMS-DOS標準テキストによるワープロ原稿が望ましい。
8. 標題（外国語併記）、著者名（ローマ字併記）、著者の所属機関名、原稿の区分、および連絡先（住所、電話番号、メールアドレス）を記入した別紙を添付する。
9. 原稿本文の冒頭に原稿の区分、標題、250字程度の和文抄録を記載する。

### 原稿の提出

10. 原稿はコピーを含め2部を提出する。なお、投稿原稿は返却しない。
11. 原稿は書留により別記編集委員会に郵送する。ワープロ原稿の場合、掲載が決定次第、電子データを添付ファイルで提出する。
12. 原稿の締切は、毎年12月末日（必着）とする。

### 編集委員会

13. 原稿の採否は編集委員会が決定する。
14. 論文と研究ノートは、別に定める査読内規に基づく審査を経て、編集委員会が採否を決定する。
15. 書評の掲載については、別に定める書評掲載にあたってのガイドラインによる。
16. 編集委員会は原稿の内容・表現等について、著者に修正・書き直しを求めることがある。また、編集委員会で用字・用語等について、修正・統一をすることがある。

### 校正・抜刷

17. 著者校正は再校までとする。その際、字句の修正以外は原則として認めない。
18. 著者には抜刷20部を進呈する。

体裁・表記

19. 原稿の執筆は以下の要領による。

- ① 本文の見出し区分は、原則としてポイントシステムを使用し、次のように表記する。
  1. \_\_\_\_\_
  - 1.1. \_\_\_\_\_
  - 1.1.1. \_\_\_\_\_
- ② 句読点は「，」「。」を用い、各1字分をとる。その他の記号類も各1字分をとるが、点線（……）・ダッシュ（—）は各2字分をとる。
- ③ 数字は引用文、および漢語の一部となっている場合を除き半角アラビア数字を用いる。
- ④ 外国語は慣用的呼称をカタカナで表記し、必要に応じて原綴を（ ）に記す。手書き原稿の欧文文字の大文字は、1マス1字、小文字は1マス2字をあてる。
- ⑤ 西暦年以外の紀年を使用するときは、必要に応じて西暦年を（ ）に入れて併記する。
- ⑥ 本文中の引用文献のタイトルは、欧語の場合は斜体で、手書き原稿はアンダーラインで示し、それ以外は『 』に入れる。
- ⑦ 本文中の論文等のタイトルは、欧文の場合は“ ”に入れ、それ以外は「 」に入れる。
- ⑧ 本文中の引用は、「 」、または“ ”に入れる。長文の場合は行を改め、本文より2字下げて記す。
- ⑨ 注は1), 2)のように通し番号を付け、全文の末尾にまとめる。その際文献の記載については、原則として以下のように記載する。

[雑誌論文からの引用]

- 1) 渡辺重夫「国民の権利としての図書館利用」『図書館学会年報』Vol.30, No.2, 1984.6, p. 55-56.
- 2) Harris, Michael H.“The dialectic of defeat : antimonies in research in library and information science,” Library Trends. Vol.34, No.3, 1986, p.515-531.

[図書からの引用]

- 3) 永末十四雄『日本公共図書館の形成』日本図書館協会, 1984, p.352-353.
- 4) Newhouse, Joseph P. and Arthur J. Alexander. An Economic Analysis of Public Library Services. Lexington, D.C. Heath Co., 1972, p.120-121.

[インターネット上の情報]

- 5) 石村恵子「電子図書館と著作権」『つくばね』[オンライン]Vol.23, No.4, 1998.4 [引用日: 1998-09-07] <URL:http://www.tulips.tsukuba.ac.jp/pub/tsukubane/2304/ishinura.html>
- 6) International Council on Archives. ISAD(G) : General International Standard Archival Description [online]. Ottawa, ICA, 1994[引用日: 1998-09-07] <URL:http://www.archives.ca/ica/isad.html>

原稿の送付先

〒101-8301 千代田区神田駿河台 1-1 明治大学司書・司書教諭課程  
日本図書館文化史研究会

## 運営委員会通信

### ■■ 次回運営委員会について ■■

次回運営委員会を、下記のように開催します。本研究会の運営に興味・関心のある方は、是非ともご参加ください。

当日ご都合の悪い方は、別記事務局まで郵便、ファックス、または電子メールで、ご意見、ご希望等をお寄せいただければ、運営委員会で検討いたします。

### 記

- 日時 12月25日(土) 11時～12時
- 場所 日本図書館協会会館 2階研修室
- 内容 1. 2010年度第3回研究例会について  
2. 2011年度研究集会について  
3. 2011年度研究集会・会員総会について  
4. 『図書館文化史研究』第28号について

ほか

### ■■ 前回運営委員会の報告 ■■

実施日：2010年9月12日  
場所：実践女子大学

以下のような事項について、協議しました。

1. 2010年度研究集会・総会について
2. 2010年度第1回研究例会について
3. 2010年度第2回研究例会について
4. 2009年度決算について
5. 「(仮称)図書館文化史研究文献目録」について
6. 「(仮称)日本図書館文化史研究会奨励賞」について
7. 研究会ウェブサイト維持について
8. 2011年度研究集会について
9. 転載許可の件
10. 『図書館文化史研究』第27号について
11. 『ニューズレター』第113号について
12. 『ニューズレター』第114号について
13. 会員動向

ほか

## 事務局だより

### ■■ 会費納入のお願い ■■

2010年度会費の納入をお願いします。会費は3,000円です。会費を納めていただく方には、封筒に「会費振替用紙在中」の朱印を捺し、振替用紙を同封しました。

なお、日本郵政公社の窓口扱いの口座送金手数料が値上げされました。つきましては、会費の送金は極力ATMをご利用くださるようお願い申し上げます。

### ■■ 住所変更等のご連絡をお願いします ■■

研究会からの刊行物の送り先などについて変更が生じた場合、あるいは封筒貼付の宛名ラベルの記載が不正確な場合、早めに事務局までご連絡ください。

### 『ニューズレター』原稿募集のお知らせ

ニューズレターの原稿を常時受け付けています。次号（115号）掲載を希望される場合、2010年12月末日までに別記事務局宛原稿をご送付ください。

今後ニューズレターでは、図書館文化史研究に関わる文献・情報を速報して行きたいと思っております。会員・非会員を問わず、関連業績などを事務局までご連絡ください。皆さまのご協力をお願いします。